Benesse®

表紙／裏表紙
埼玉県 ● 認定こども園 こどものもり

『これからの幼児教育』刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

『これからの幼児教育』は
全国の園長先生に無料で
年3回お届けしています。

次号（夏号）は
2013年5月下旬発刊（予定）です。

これからの幼児教育 2013 春

2013年1月30日発行 発行人 新井健一 編集人 後藤憲子 発行所 ㈱ベネッセコーポレーション ベネッセ次世代育成研究所
©Benesse Corporation 2013

子どものよりよい育ちをともに考える
ベネッセの情報誌

2013 春 Spring

これからの幼児教育

第1特集
保育者の気づきと学びを促す園内研修とは？
インタビュー ● 大妻女子大学教授 岡 健

第2特集
園内環境を見直す7つのポイントと工夫
チェックシートつき

連載 どう見る？ 子どもの行動「うそ」

園内で回覧してください

Benesse® 次世代育成研究所

これからの幼児教育 2013 春 Spring CONTENTS

2 第１特集

保育者の気づきと学びを促す園内研修とは？

2 インタビュー
園内研修が活性化する３つのポイント
大妻女子大学教授 岡 健

6 事例
写真と付箋紙を活用した研修で、子どもの見方を広げる
せんりひじり幼稚園（大阪府・私立）

10 アイディア
全国の園長先生に聞いた
「園内研修を成功させる工夫」

12 データから見る幼児教育

小学校以降の学びの土台となる幼児期の生活と経験とは？

解説◎東京大学大学院教育学研究科教授 秋田喜代美

16 第２特集

園内環境を見直す７つのポイントと工夫

16 インタビュー
「子ども視点」で保育環境を見直す
早稲田大学准教授 佐藤将之

18 ヒント
今日から見直す保育の室内環境

22 読者からのアイディア集
全国の園長先生から寄せられた「保育環境」の工夫

23 チェックシート
園内環境を見直すための「チェックシート」

24 連載

どう見る？ 子どもの行動
うそ

「これからの幼児教育」2013春号 2013年1月30日発行

発行人 新井 健一
編集人 後藤 憲子
発行所 （株）ベネッセコーポレーション
〒163-0411 東京都新宿区西新宿 2-1-1
新宿三井ビルディング

企画・制作 ベネッセ次世代育成研究所
印刷・製本 凸版印刷株式会社
編集協力 （有）ベンダコ、二宮 良太
撮影協力 ヤマグチイッキ 荒川 潤
イラスト協力 アサヌマリカ

© ベネッセ次世代育成研究所 ◎無断転載を禁じます ※掲載内容は2012年12月中旬現在のものです。

ベネッセ次世代育成研究所とは

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家のかたがたに発信し、よりよい子育て環境をつくる一助となることを目指します。

本誌は無料です

ベネッセ次世代育成研究所の発刊物は、ご希望に合わせて園へお届けします

※ただし、複数冊をご希望の場合は、宅配料がかかる場合がございますので、あらかじめご了承ください。

お手続き方法

電話、もしくは、ホームページよりお申し込みください。通常はお手続き完了から**1週間～10日程度**でお届けします。**お急ぎの場合はホームページからのダウンロードが便利です。**

電話

0120-933-964 通話料無料
受付時間◎10：00～17：00（日曜・祝日は除く）
※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。
※携帯電話・PHSからもご利用になれます。
※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は
086-270-5037へおかけください。
（ただし通話料がかかります）

ホームページ

インターネットで検索してください。
ベネッセ次世代育成研究所 検索
http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/
◎ベネッセ次世代育成研究所の発刊物のお申し込みと閲覧（PDFファイルのダウンロード）が可能です。

発刊物の紹介

これからの幼児教育 A4判 24ページ
◎主な記事の内容（最新５号分）
2012年 秋号 特集 保育者の力を引き出す園長のリーダーシップ
夏号 特集 これからの園運営を考える
春号 特集 子どもの力を引き出す園での信頼関係
2011年 秋号 特集 のめり込める遊びで幼児の心と体は育つ
夏号 特集 情報発信で保護者と「つながる」園をつくる
※上記以外のバックナンバーについてはホームページをご覧ください。

その他、幼児教育・保育に関する発刊物
- 第１回 幼児教育・保育についての基本調査報告書（幼稚園編・保育所編）
- 幼児の遊びにみられる学びの芽
- 保育所での子どもの発達と保育のポイント

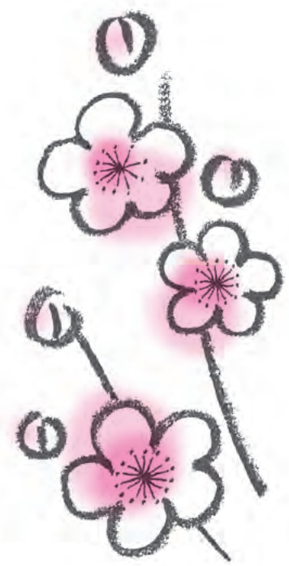
はじめに

今年度もあと残り２カ月となりました。卒園・修了式の準備などを進める中で、次の１年に向けて、今年度の振り返りを始めている園も多いのではないでしょうか。

園に求められる役割が多様化・複雑化する今、日々の保育の喜びや反省を園内で共有し、特に若い保育者の成長を支えていくことは、これまで以上に重要です。

今号の第１特集では、一人ひとりの保育者が前向きに保育を振り返り、明日の保育につなげることができる園内研修の進め方を取り上げます。園内研修の進め方のポイントに加え、全国の園長先生の工夫もご紹介します。また、第２特集では、よりよい園内環境について考えます。

どちらの特集も、次年度に向けてさまざまな取り組みを考え始める時期に、お読みいただきたい内容になっています。それぞれの園の良さ、魅力をさらに引き出すうえでお役に立てば幸いです。



第1特集

保育者の気づきと学びを促す園内研修とは？

園内研修の主眼は、保育者の力を引き出し、保育の質を向上させていくことにあります。
しかし、多忙な中では研修を実施するのが精一杯という園も少なくないようです。
どうすれば園内研修を通して効果的に保育者の力を高められるでしょうか。

インタビュー

園内研修が活性化する3つのポイント

園内研修は、「なかなか発言が出ない」「保育者の気付きにつながらない」など悩みも多いようです。
そこで大妻女子大学教授の岡健先生に、こうした悩みを解決するヒントとして
園内研修のポイントを解説していただきました。

園内研修での関わり合いが保育者の思考を豊かにする

園内研修の効果的な進め方について説明する前に、まずは園内研修がなぜ大切なのかを改めて考えてみましょう。

保育をしていると、どうしても疑問や悩みをひとりで抱え込んでしまいそうになることがあります。そのようなときに他の保育者の話を聞く機会があると子どもの見方が豊かになったり、新しい保育のアイディアが生まれやすくなったりします。「1＋1」が、ときには「3」にも「4」にもなるのです。そのように保育者が意見を交わし合い、新しいものを生み出していく場が園内研修と言えるでしょう。

ひとりで学ぶ姿勢も大切ですが、気付きというものは、他の人からもたらされることが多いものです。人は、「無」から「有」を生み出せません。自分にはない経験をもつ人と学び合うことで、初めて気付けることがあるのです。

また園長先生などが、どれだけ指導をしても、なかなか保育者に変化が表れないこともあるでしょう。これは、保育者が頭では理解していても、本当に自分のものとして身に付いていないからです。「腑（ふ）に落ちた」「納得した」と実感することで自分のものとして保育に生かすことができます。その意味でも、「教えられた」ではなく、「自分で学んだ」という実感が得られる園内研修を導入する必要性があります。

ただし、園内研修に飛びつけばよいわけではありません。まずは「人が学ぶ、育つ」とはどういうことかを園長先生が理解したうえで研修の質を充実させていく必要があります。

大妻女子大学教授
岡 健
おか・けん
大妻女子大学家政学部児童学科、同大学大学院人間文化研究科人間生活科学専攻教授。専門は保育学、教育方法学、遊び論、環境構成論など。

園内研修によって保育の質が高まれば、子どもが変わり、それを受けて保育者もまた変わり、園全体の雰囲気がとてもよくなります。それが保護者や地域にも伝わるという好循環も生まれます。そのようにして組織の風土はつくられていくのです。ただ、すぐに効果が出るわけではないため、ある程度、長い目で見て続けていく必要があるでしょう。

これから園内研修が活性化するポイントを大きく3つに分けてお話しします。

❶ 全員参加の「創発型会議」を行う

ふだんの会議を見直すことが園内研修の土台となる

最初のポイントは、「伝達型会議」だけではなく、「創発型会議」を取り入れることです。研修も会議も「言葉」によって進行するという意味では同じですから、研修のみならず日常的な会議の型を意識し、それを目的に合わせて使い分けることを意識すると、結果として研修のあり方をも変えることにつながります。

一般的に園では、園長先生やベテランの保育者などが一方的に情報や知識を伝える「伝達型会議」を行うことも少なくないでしょう。伝達型会議は、情報を共有する場合には役立ちますが、一人ひとりが意見を出しにくいのが欠点です。また、ただ伝えるだけの会議では、内容の9割は忘れられてしまうと言われています。

そこでおすすめしたいのが、ワークショップのスタイルを取り入れた「創発型会議」です。これは、すべての参加者の意見を尊重しながら進めていく会議です。

例として、運動会の内容を検討する会議を考えてみましょう。従来型の伝達型会議では、進行役が「昨年はこのような内容でした」などと伝え、それを踏襲する形で決まっていくことが多いと思います。この場合、往々にして「どうやるのか」といった進め方の部分が話の中心になりがちです。

それに対し創発型会議では、例えば会議の「しかけ」として、まず一人ひとりが昨年の運動会のプログラムを「必要なもの」「できればあったほうがいいもの」「あってもなくてもいいもの」「いらないもの」と整理を試み、その仕分けた理由をそれぞれ発表します。

ある先生は「来賓挨拶」を時間短縮の観点から「いらないもの」と仕分けるかもしれません。また、ある先生は、地域とのつながりの観点から「必要なもの」と仕分けるかもしれません。ここには正解・不正解があるわけではありません。むしろこうした個々の先生の考えが、仕分けるという「しかけ」を通して会議の場に出されることで、改めて自園において「来賓挨拶」をどのような意味で扱うのかを考えられることになるのです。

前例に従い「どうやって」から考えるのではなく、「しかけ」を通して「なぜ」から考える。このことで、みんなが意味を見い出し、共有することで、それぞれ納得して実施することができます。

同じように、園内研修も目的によって手法を変えることが大事です。知識共有が目的であれば、伝達型でもよいでしょう。そうではなく、「ベテランや若手が一体となった組織をつくりたい」「子どもの見方を広げたい」「子どもの理解を深めたい」「明日の保育がよくなるようにしたい」といった目的がある場合は、みんなでつくり上げていく創発型研修が適しています。

創発型研修で大切なのは、まずは出された意見は決して否定しないことです。どのような意見であれ、多様なほうが考えるタネになるからです。さらに、保育者が次も安心して意見を出すことができます。

ただし、たくさんの意見を出しただけでは、「結局、何を決めたのかわからなかった」で終わってしまう落とし穴もあります。そこでファシリテーターは、話し合いの場で意見が受け止められていることに気を配るだけでなく、似ている意見をくっつけたり、少し異なる意見に広げたりして、参加者の考えが集約されていくよう促していく必要があります。そして最終的には、「みんなでこのように進めましょう」と、取り組む方向性が具体的に確認し合えれば、研修は成功といえるでしょう。

❷ 思考を「見える化」して発言を引き出す

若手が意見を言いたくなるしかけが研修を活性化させる

園内研修の悩みとして、園長先生などから耳にするのが、「若手から意見が出ない」というもの。よくあるのが、園長先生などが話すと場が静かになってしまい、雰囲気を変えようと主任クラスが若手に意見を求めるものの、ますます雰囲気が悪くなるという悪循環です。

この状況を改善するためには、もう少し若手の気持ちを考えてみるとよいかもしれません。「若手から意見が出ない」と言ってしまうと、最初から若手にプレッシャーを与えてしまいます。それよりも、「なぜ意見が出ないのか、意見が出せないのか」を考えてみましょう。

意見が言えないのは、意欲がないからではなく、経験がないからではないでしょうか。人は経験があるからこそ意見が言えるのです。ですから、経験の浅い若手でも意見を言えるような、また言いたくなるような「しかけ」が必要になります。

そのために有効なのが、思考を「見える化」することです。発言者が限られるのは、頭の中だけで「空中戦」が行われているからです。思考が誰の目にも見えるようになれば、じっくりと考えやすくなります。さらに他の保育者の意見に刺激されて考えも生まれやすくなります。

話し合いの内容をホワイトボードに書くのはひとつの方法です。思考の過程をたどれるため、自分の意見をまとめやすくなるでしょう。

付箋紙などの「見える化」ツールで一人ひとりの発言を引き出す

さらに個々の意見を引き出すために重宝するのが付箋紙です。使い方は簡単です。発表前に考える時間を設けて自分の意見をひとつずつ付箋紙に書き留めていくだけです。そして付箋紙を見ながら発表します。

付箋紙のよい点は事前に書くために、「先に同じ意見を言われたらどうしよう」といった不安がなくなるほか、既に自分の考えを書いているため、他の保育者の意見に耳を傾ける精神的な余裕が生まれます。保育者が発表を終えたら、似た意見を集めて付箋紙を分類すると、さまざまな意見が容易に比較できるでしょう。

さらに創発型研修では、一人ひとりからいかに発言を引き出せるかがカギを握ります。そのためには、写真を用いるのもよい方法です。保育で印象に残ったり、よいと思った場面の写真を持ってきてもらい、なぜ選んだのか理由を聞きます。すると撮影者によってさまざまな観点や理由が語られ、そこから保育観があぶり出されます。また写真は、言葉になっていること以上の情報も他者に見えるのがよいところです。

こうした園内研修を続けていれば、保育に対するアイディアがもらえたり、新しい見方に気付いたりしますから、「またやりたい」という気持ちが生まれます。自分の事例を取り上げてほしいという前向きな気持ちも出てくるでしょう。

研修で得た学びを保育で実践すれば、実際に子どもに変化が表れて効果を実感することも出てきます。すると、日々の保育の中で「次はこう変えてみよう」などと、主体的な姿勢につながっていきます。

❸ 日頃から保育者同士が学び合う風土をつくる

「無駄」と思える時間が雰囲気づくりに役立つことも

園内研修の効果を高めるうえで大切なのが、日ごろから保育者同士が学び合う風土をつくることです。

それにはまず、園長先生自身が、「いろいろな先生と話すのはとても豊かな体験である」という実感をもち、みんなに話しかけたり、意見を聞いたりすることがスタートだと考えています。園長がそうすることで、徐々に保育者同士が会話をする雰囲気が生まれていくでしょう。

また保育者がお互いの人柄を理解し合う場をつくることも効果的な方法です。人柄が分かっていれば、多少意見をぶつけ合っても、あまり問題は起こらないものです。人柄を理解し合うためには、食事会やレクリエーションを行うのもよい方法でしょう。多忙化が進む中で、保育時間外の交流の場は減少する傾向にありますが、そのように、一見、「無駄」と思える時間が人間関係づくりに大いに役立つことが見直されるべきだと思います。

日頃の会議を通して、雰囲気づくりを行うこともできます。例えば、会議の司会を園長先生やベテランの先生が務めることも多いのではないでしょうか。しかし、説明や説得をしたくなってしまう人が司会をすることには十分注意した方がいいでしょう。というのも、企画の提案者は、その企画が良いと思って案を作成しています。よかれと思って他者が意見したとしても、それが企画案と異なっていれば、自分の意見を再度説明しようとするでしょうし、それは若い先生には説得されているように映ってしまう（自分の意見を遮られているように映ってしまう）場合も少なくありません。

意見が多様に出ることは、話が混乱していることでも、無駄なことでもなく、豊かな話し合いの基盤ができているからであり、そのような場では一人ひとりが自分の意見が大切にされている実感を持つことができます。そのためには、司会者は発言者を支え、会議の場の中に一つ一つの発言を丁寧に位置付ける配慮が求められます。

司会をする先生が案を提案するなど、司会者としての配慮が難しくなるような場合、その案件について司会を替えるといった対応も大事でしょう。

ただ、組織内ではどうしても人間関係が固定してしまいがちですから、園内研修に外部からファシリテーターを招くのもよい方法です。それによって、自分たちだけでは気付かなかった視点を得られることも多いものです。

さまざまな方法を述べましたが、保育者同士の関係性は一朝一夕には変わらないものです。それでも、日頃から雰囲気づくりを心がけていれば、必ず学び合う風土は醸成されていくと信じてがんばっていただければと思います。

現場のみなさんへ

子どもも保育者も保護者も、みんなが幸せに、そして元気になれる保育を目指していただきたいと思っています。そのために、自分の保育に誇りや自信をもち、素敵な子どもたちと接する時間を楽しんでください。

園長先生の立場を考えると、どうしても短時間で成果や結果を出すように求めてしまうことは理解できます。それでも、豊かな人間を育てていくためには、意外と無駄に思える時間が大切であることも忘れないでください。

事例

写真と付箋紙を活用した研修で、子どもの見方を広げる

せんりひじり幼稚園（大阪府・私立）

せんりひじり幼稚園では、大妻女子大学教授の岡健先生の指導のもと、全員参加の園内研修に取り組んでいます。
そこには、保育者の主体性を引き出し、研修を実りのあるものにするためのさまざまな工夫があります。実際の園内研修の様子とともにご紹介します。

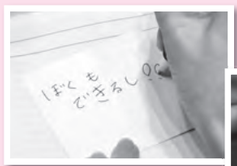
実施時間	1時間
参加者	年少クラス担当10名、ファシリテーター1名
場所	体育館
テーマ	年少の子どもの育ちの変化

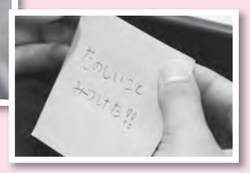
❶ 1枚の写真をもとに、子どもの気持ちを付箋紙に記入

保育者それぞれが子どもの心の中のつぶやきを考え、「吹き出し」を作る（10分）

①

写真は、保育者が印象に残った保育の場面を撮影し、持ち寄ったものの中から1枚を選びます（今回使用した写真の状況：いつもやりたい遊びが見つからない3歳児のTくん。でもクッキングの時間にみんなと一緒に取り組む姿勢を見せた）。写真をホワイトボードに貼り、まずは保育者が各自でTくんのそのときの気持ちや心の中のつぶやきを「吹き出し」として付箋紙に記入しました。





⬅⬇付箋紙に記入しながらひとりで考える時間をとることで、自分の意見や見方が明確になります。

この場面のよさとポイント

子ども自身の言葉を考える（吹き出しにする）ことのメリットは、考える過程で徐々に子どもの気持ちを的確にとらえられること。吹き出しの言葉には保育者の価値観がはっきりと表れます。

「吹き出し」の内容と、そう考えた理由をひとりずつ発表（10分）

②

付箋紙に書いた内容をひとりずつ発表。さまざまな観点から子どもの気持ちが示されました。ファシリテーターは「それはどういうこと？」「そのように思った理由は？」などと質問し、Tくんの言動の背景にある育ちや思いに対する見方を深めていきました。

⬅自分の考えが先にあることで、他の人の考えを自分と比べながら位置付けることができます。

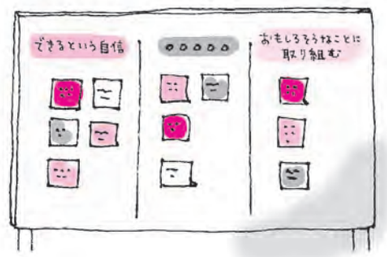
この場面のよさとポイント

吹き出しはひと言ですから発表するのは容易ですし、他の保育者の発表も頭に入りやすく、わかりやすいというよさがあります。

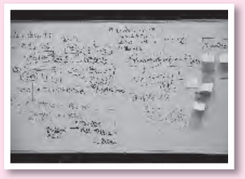
❷ 他の保育者の意見から、子どもの見方を広げる

全員の付箋紙の内容をグループ化して話し合う（10分）

③



ファシリテーターは、似ている内容をグループ分けしてホワイトボードに整理。例えば「ぼくだってできるし」「ぼくだってできるもん。先生見てて！」は「できるという自信」というグループに、また「楽しいこと見いつけた」「楽しいなあ。どうして切れるのかなあ？」という内容は「おもしろそうなことに取り組む」というグループに分けられました。



⬅内容をグループ化することで論点が明確になり、話し合いやすくなります。

この場面のよさとポイント

保育者は自分と同じ見方や異なる見方があることを視覚的に理解しやすくなります。また全員の意見が掲示されることで、若手も意見を出しやすくなります。

自分にはなかった子どもの見方にふれ、視野を広げる（30分）

④

例えば、「ぼく、できたよ！」という吹き出しをつけた場合は、「自信」という育ちを見い出したということ。そこで、その自信を伸ばすために、「できたね、すごいね！」と認める声かけや活動などの次の一手が考えられることを解説しました。さらに、それぞれの吹き出しの内容から、保育の改善案を考えました。

⬅ファシリテーターは自分の価値観を押しつけないように注意しながら、研修のまとめとして最後に方向づけします。

この場面のよさとポイント

最後は、研修の流れを振り返って共有し、「どのように明日からの保育に生かすか」を考えます。それぞれの保育者が「自分はこれを学ぶことができた」という納得感をもって終わることが理想です。

写真と付箋を活用した研修を終えて

プロセスを「見える化」したことで明日の保育につながる研修に

せんりひじり幼稚園は、どのようにして園内研修を自園の取り組みとして定着させたのでしょうか。園内研修を通して得られた成果とともにうかがいました。

毎月の研修内容をもとにカリキュラムを検討

せんりひじり幼稚園には、研修の種類がいくつかあります。現在は、外部講師を招いての全体研修を年4回、園内のみの全体研修を4回、また学年ごとに行う研修を15回ほど実施しています。

全体研修は、全員で保育観や子どもの見方を広げ、深めることをねらいとしています。また頻繁に実施する学年研修では保育と実践をリンクさせることを目指しています。

「毎月、学年でその時期の子どもの成長や変化を理解・共有する研修を行い、その内容をもとに次の月のカリキュラムを考えています。研修は研修、保育は保育と分かれてしまうことを防ぐために、おととしからこうした方法を始めました。個々の子どもを理解することで、どのような保育をすればよいかという『答え』はおのずと見えてくると考えています」

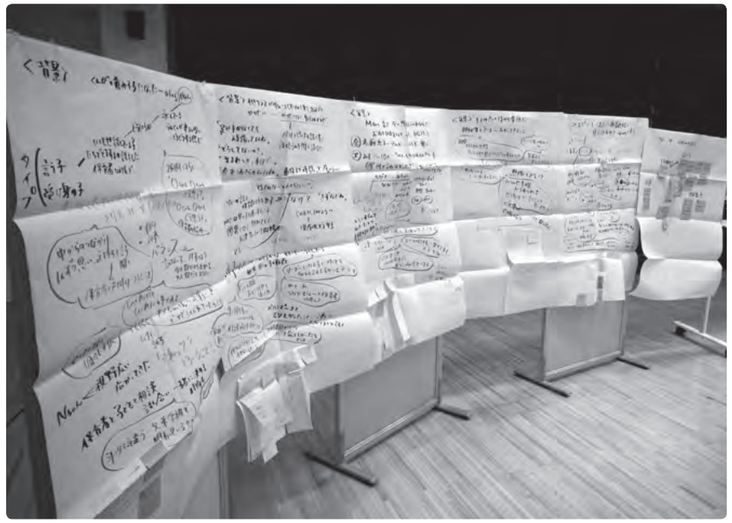
学年研修では、学年主任か副主任がファシリテーターとなり、印象的な場面を写して持ち寄った写真をもとに保育者が意見を交わし合います。毎月、一人ひとりの子どもの印象的な写真を掲載してコメントを書き添えた「ポートフォリオ」をつくって保護者と共有しており、その写真を研修にも用いることが多いそうです。

園長
安達譲先生

全体研修と同様、学年研修でも付箋紙や模造紙を用い、エピソードや写真を持ち寄って、子どもの気持ちや保育者の思いが見えるようにして話し合いを促すことを心がけています。

「言葉だけだとイメージが共有しづらく、特に、ベテランと若手が同じイメージをもちながら話し合いを続けるのは困難です。そこで写真や付箋紙といった道具が役立ちます」

「保育に関する悩みは尽きませんが、その答えは子どもたちがもっています」と安達先生。子どもたちを理解するために、さまざまな研修の手法や多様な視点を得ることが必要であり、そのために、外部講師を招いての園内研修は欠かせないと先生は言います。



研修で話し合った内容が目に見えるように模造紙やホワイトボードにまとめます。どのような意見が出されたかが一目瞭然で、振り返りが効果的にできます。

若手に配慮したテーマの設定方法

園内研修のテーマ設定も工夫しています。

「園長などが上から押し付けるようにテーマを決めても主体的に取り組めません。そのため、『この子どものことが心配』『こんなことに困っている』といった具体的な声からテーマを設定するようにしています」

ベテランは、他の保育者の課題を一般化して自分の保育に生かすことができますが、新人の保育者にはそれがなかなかできません。そこでできるだけ、新人の悩みからテーマを設定するようにしています。

保育者同士が学び合う土壌が研修を活性化させる

このようにせんりひじり幼稚園が園内研修に力を入れるようになったのは、園長の安達譲先生が参加していた「保育と仲間づくり研究会」のもち回りで公開保育を実施したことがきっかけでした。

「そこでは『子どもたちが主体的に遊んでいない』といった厳しい意見が多く寄せられました。それを受けてベテランの保育者が中心になり、『今までのやり方を変えよう』と奮起して園内研修に本格的に取り組むようになったのです」

すべての保育者が園内研修に前向きに取り組むことができる“土壌”となったのが、良好な同僚性があることでした。園では、新規の保育者の採用過程で一般の保育者も面接に参加するなどして関わっています。そのこともあって、どの保育者も「みんなで若手を育てよう」という気持ちをもっており、後輩の成長を喜ぶ雰囲気があると言います。

「子どもへの接し方と同じように、後輩の指導の際は否定的な言葉ではなく、『こんな方法もあるよ』といった提案をしてコミュニケーションを深めながら育てています」

否定されず、肯定的に受け止めてもらえる関係があるから、若手も発言しやすい。それが園内研修を活性化させる大きな要因のひとつとなっているようです。

研修の感想

研修の事例で登場したTくんの担任

松本里歩先生

他の先生から急に意見を求められると、頭の中が真っ白になることがありますが、付箋紙を使うと、自分の考えをきちんと伝えられるよさがあります。さらに、先輩の先生がたが自分の書いた付箋紙を見て、「こういう見方もあるね」などとコメントしてくれると安心して自信も深まります。

今回の研修では、Tくんに「自分もやりたい」という気持ちが育ってきたことを発表しました。すると、やりたいという気持ちだけではなく、「見ててよ」「やったぞ」など、他の見方もできるという意見が寄せられて勉強になりました。その内容を踏まえ、早速、翌日からの保育で褒めたり声をかけたりするポイントを副担任の先生と共有しました。

年少の学年主任

谷郁子先生

今回の研修では、1枚の写真を見ても人によっていろいろな子どもの見方があることに気づきました。日ごろから子どもを見る際には、「今、どういう思いをもっているか」をさまざまな角度からイメージしたいと思いました。

また、若い保育者がふだんから思っていることや感じていることを自由に伝え合う場面を大切にして、成長を促していきたいです。ふとしたひと言から話が広がることもあるので、学年研修のファシリテーターとしてそのようなひと言を逃さないようにしたいと思います。

せんりひじり幼稚園

◎1923（大正12）年に創立の「ひじり幼稚園」の姉妹園として1966年に開園。人とのかかわりや自然とのふれあいの中で、自己肯定感を育てることを大切にしている。

園　長　安達譲先生
所在地　〒560-0081　大阪府豊中市新千里北町3-2-1
園児数　426名

アイディア

全国の園長先生に聞いた
「園内研修を成功させる工夫」

「発言が出ない」「忙しくて時間がない」など、園内研修にまつわる悩みはどのようにすれば解決できるのか。全国の園長先生に聞きました。

「意見がなかなか出ない！」ときは…

❶ 意見を言いやすい関係・雰囲気づくり

●何でもしゃべってよいのだと繰り返し説明し、まずは全てを認め合うことを全員に徹底しています。そのうえで、全員が必ず意見を述べることを心がけています。（佐賀県・私立幼稚園）

●まず園長として保育者一人ひとりの頑張りを認めることを心がけています。そして、自分の失敗談を積極的に伝えるようにしています。（富山県・公立保育園）

●堅苦しくならないよう、車座に座って、ざっくばらんな雰囲気で進めるようにしています。自分の失敗談を織りまぜながら、進めることもよくあります。（徳島県・公立保育園）

❷ 少人数グループに分ける

●大勢の中で声を出すことが簡単ではないようなので、少人数のグループに分けて、さらに付箋紙を使ってアイディアを出すなど、発言しやすいような環境をつくっています。（和歌山県・私立保育園）

●年齢ごとに小グループに分け意見討議したあと、全体で集まって報告しあう形は有効でした。（東京都・公立保育園）

●少人数のグループで意見を出し合い、その後グループごとに発表をするという形をとって研修しています。５～６人の小グループ内ではよい意見が出ています。（三重県・公立保育園）

❸ テーマの設定を工夫する

●普段から保育者が気になっていることをテーマに取り上げるようにしています。また、コミュニケーションを取りやすい、わかりやすい資料をそろえるように配慮しています。（山梨県・公立保育園）

●保育者に学習したいテーマを選んでもらって、自主勉強会を月１回行っています。自分が学習したい内容なので、意見は出やすくなりました。（広島県・私立保育園）

●年度初めに、どんな内容の研修をしたいか、皆で意見を出し合い、どんな日程で、誰が講師をするのかを決めます。自分たちで決めるので参加への意欲が湧きます。（兵庫県・私立保育園）

❹ 事前準備を工夫する

●研修で使用する資料は事前に配布し、目を通してから参加するようにお願いしています。学年ごとに意見をまとめてきてもらい、報告形式から話し合いに発展させることもあります。（愛知県・公立幼稚園）

●若い先生はその場で意見を言いにくい傾向にありますが、前もってテーマを伝えておくと、自分なりに考えてくることができるようです。紙に書いてあらかじめ提出してもらい、資料としてまとめることもあります。（滋賀県・公立幼稚園）

「時間がない」ときは…

❶ 形態にこだわらず実施する

●時差出勤などの関係でまとまった時間を確保するのは難しいので、その分、廊下やクラスの前の場所など子どもから目を離さない場所で、園長を囲み行事の予定、反省、研修報告を、こまめに行うように心がけています。（徳島県・公立保育園）

●午睡の時間に各クラスから１名ずつ出てもらっています。短い時間ですが、お茶を飲みながら楽しい雰囲気で話せるようにしています。（新潟県・公立保育園）

●掃除終了後、終礼として参加できる職員で集まり、その日の出来事やこれからの行事について話し合っています。（東京都・公立保育園）

❷ 短時間で行う

●毎週の打ち合せ時、30 分間を研修時間として活用しています。わずか 30 分ですが、それでも毎週必ず実施できるので、内容面でも良い積み上げができていると実感しています。（北海道・私立幼稚園）

●全員の了解を得たうえで、昼間の休憩時間を職員会議の時間に使うことがあります。残った時間は必ず休憩を取ってもらっています。（埼玉県・公立保育園）

●当園も研修の時間がなかなか確保できなかったのですが、子どもの午睡時間や降園後に「○時まで」と時間を決め、「月１回は必ずやろう！」と決めました。（広島県・公立保育園）

❸ 同じ内容の研修を２回実施

●全員がそろう時間がなかなかつくれないので、同じ研修を 90 分構成にして２回、午睡中に行っています。園長にとっては２回実施するのは大変ですが、保育者の人数が少ない分、目と目が合う距離で話しやすくなり、研修内容の浸透度もよくなりました。（佐賀県・私立保育園）

●研修は日中の昼寝の時間に行います。１日で全員参加することは難しいので、翌日、出席者を変えて同じ内容の研修を行います。（岩手県・私立保育園）

データから見る幼児教育

小学校以降の学びの土台となる幼児期の生活と経験とは？

ベネッセ次世代育成研究所は、2012年1～2月、年少児～小学1年生の子どもをもつ母親5,016名に「子どもの学びの芽生えと、母親の関わり・小学校に向けての意識」などについて調査を行いました。この調査結果から今回は「幼児期に育んでおきたい学びに向かう力」についてご紹介します。園から家庭への情報提供の材料のひとつとしてぜひご活用ください。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ次世代育成研究所『幼児期から小学1年生の家庭教育調査』（2012））。

園から小学校の移行期に子どもがスムーズに「学び」に向かうために

東京大学大学院教育学研究科教授
秋田喜代美
あきた・きよみ

東京大学大学院教育学研究科教授。日本保育学会会長。専門は保育学、発達心理学、教育心理学、教師教育。著書に、『保育の心もち』『保育のおもむき』（いずれもひかりのくに）など。今回ご紹介する調査の監修者でもある。

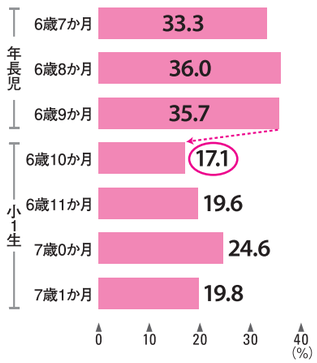
幼児期に育みたい「学びに向かう力」

今回の調査では、幼児期に大切なこととして「生活習慣」「文字・数・思考」に加え、「学びに向かう力」の重要性が明らかになりました。「学びに向かう力」とは、自分の気持ちを言う、相手の意見を聞く、物事に挑戦する、自分の気持ちを調整するなどの力で、生涯にわたる学びの基盤になる力を指します。「生活習慣」「文字・数・思考」「学びに向かう力」の３つは相互に関わっていることもわかりました。

調査結果で気になったのが、「学びに向かう力」のひとつである「人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる」が、小学校入学を機に下がっていることです（図１）。これは、環境が大きく変わって子どもがうまく対応できない場合があるからかもしれません。さらに「小学校に入ったら、こうあってほしい」という保護者の期待が大きいため、子どもの能力を実際より低く評価してしまうこともあるでしょう。

そこで園では年長児の終盤で、子どもの気持ちの安定と自信を育むサポートをする必要があります。子どもは自分に自信をもてれば、環境が変化する中でも自分を主張し、自分をコントロールする余裕をもてるのです。

図1 人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる（とてもあてはまる）



※注１：2012年１月時点で何歳何か月だったかを割り出し、各月齢ごとに「とてもあてはまる」と回答した割合。

生活習慣が定着している子どもは「学びに向かう力」が高い

図2-1 物事をあきらめずに、挑戦することができる（年長児）

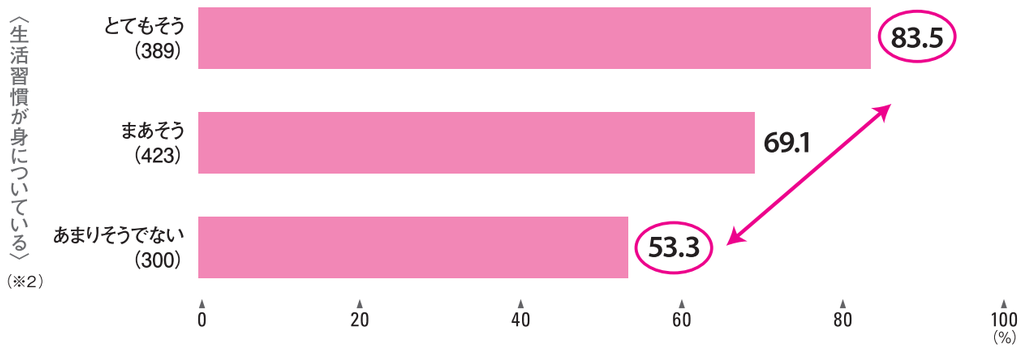
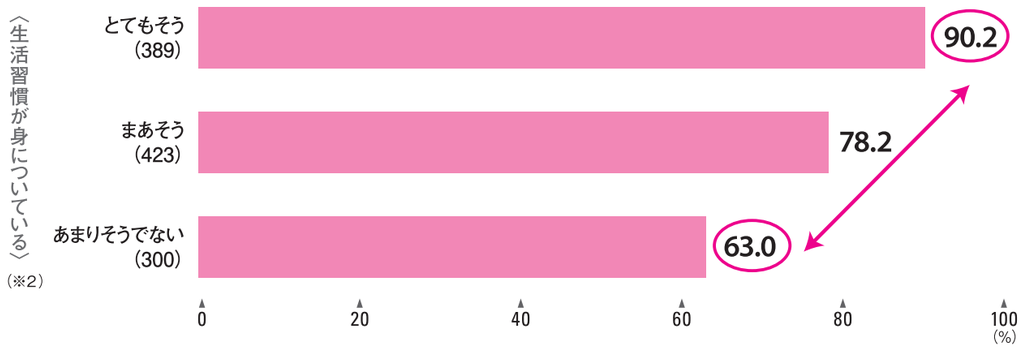


図2-2 人の話が終わるまで静かに聞ける（年長児）



※1：（　）内はサンプル数
※2：生活習慣について：「夜、決まった時間に寝ることができる」「脱いだ服を自分でたためる」「食事が終わるまで、席に座っていられる」「好き嫌いなく食事ができる」「1人でトイレでの排泄、後始末ができる」「まわりの人に『おはよう』『さようなら』『ありがとう』などのあいさつやお礼を言える」「家で遊んだ後、片付けができる」の7項目について、“とてもあてはまる”を4点、“まああてはまる”を3点、“あまりあてはまらない”を2点、“ぜんぜんあてはまらない”を1点として算出し、平均点を3区分した。すべて回答した人のみ分析した。

★年長の段階で生活習慣が身についている子どもは、そうでない子どもよりも、より「物事をあきらめずに挑戦することができる」「人の話が終わるまで静かに聞ける」傾向にあることがわかりました（例えば生活習慣が「とても」身についている子どもでは「物事をあきらめずに挑戦することができる」割合が、83.5%ですが、「あまり」身についていない子どもでは 53.3%でした）。幼児期に生活習慣を身につけることは「学びに向かう力」に深く関わっていることがわかります。

秋田先生の解説 なぜ生活習慣と「学びに向かう力」が関連しているのか、「片付け」を例に、このデータを説明してみましょう。片付けは、「次に使いやすいように工夫する」「他の人が使いやすい状態とはどんなことかを考える」といった見通しをもつことが必要です。また、みんなの役に立ちたいという気持ちや、自分をコントロールする力も関わってきます。これらは、自分の行動を調整し、見通しをもつ力となり、学びに深く関係してきます。

きちんとした生活習慣を通して、見通しのある行動や時間の管理ができるようになることで、学びに向かう力も育っていくと考えられます。

幼児期に集中して遊ぶなどの機会が多いほど、小1で家庭学習に向かう力が高い

図3-1 机に向かったら、すぐ勉強にとりかかる（小1生）

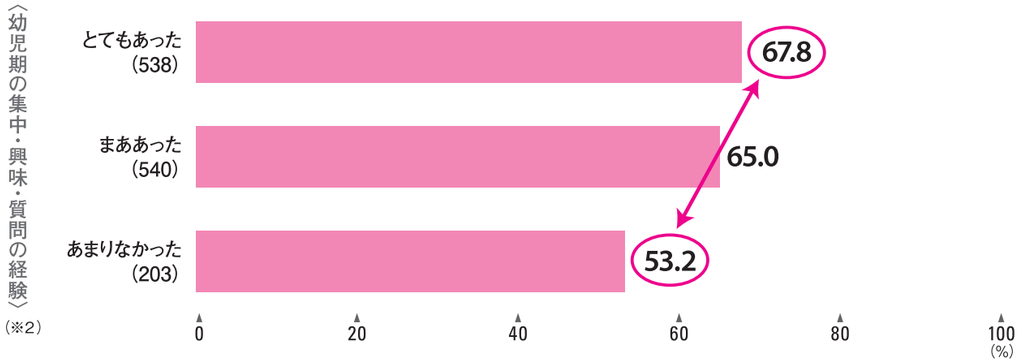
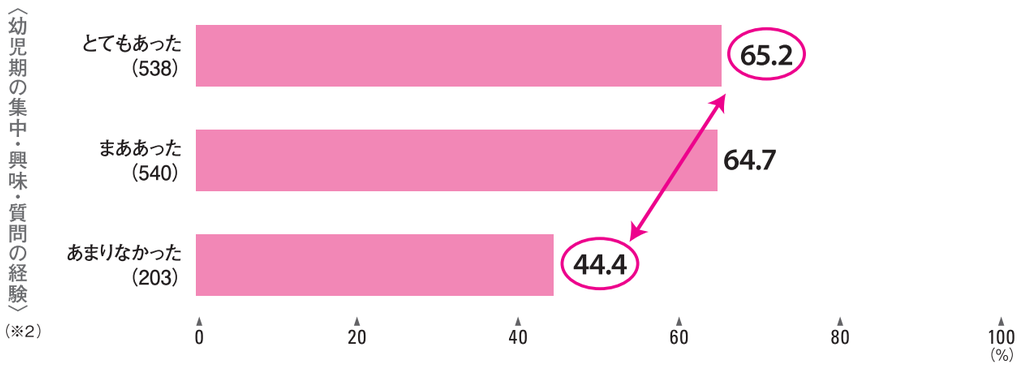


図3-2 勉強が終わるまで集中して取り組む（小1生）



※1：（　）内はサンプル数
※2：幼児期の集中・興味・質問の経験について：幼児期の学習準備に関する3項目「好きなことに集中して遊んでいた」「生き物や植物に興味をもっていた」「わからないことについて、まわりに質問していた」について、“とてもあてはまる”を4点、“まああてはまる”を3点、“あまりあてはまらない”を2点、“ぜんぜんあてはまらない”を1点として算出し、平均点を3区分した。すべて回答した人のみ分析した。

★幼児期に、好きなことに集中して遊んでいたり、わからないことをまわりに質問したりするなどのことが「とてもあった」子どもほど、小1生で、勉強が終わるまで集中して取り組んだり、机に向かったらすぐ勉強にとりかかったりするなど家庭学習に向かう力が高い傾向にあることがわかりました。幼児期に集中したり、興味をもったりするなどの経験をすることが、小学校での学習の取り組みに関連していることがうかがえます。

秋田先生の解説　このデータから分かるのは、幼児期に遊びに没頭し、集中したり興味をもったりする体験が、小学校の授業だけでなく家庭学習に集中する力に関わるということです。活動に没頭して深く考えるという行為は、遊びであっても学習であっても同じことなのです。そのような力が育っていないと、学習時間が長くても集中力に欠け、学習効果も低くなってしまいます。

幼児期から子どもが問いをもち、質問をするようにしていくことも大事です。ただ言われたことをやるのとは違い、自ら問いをもって始めた行動は深い興味・関心が伴うからです。そのように追求する力を育むことで、その後の学びに対する姿勢は大きく変わってきます。

「子ども自身が考えられるように促す」保護者の子どもほど、「学びに向かう力」が高い

図4-1 物事をあきらめずに、挑戦することができる（年長児）

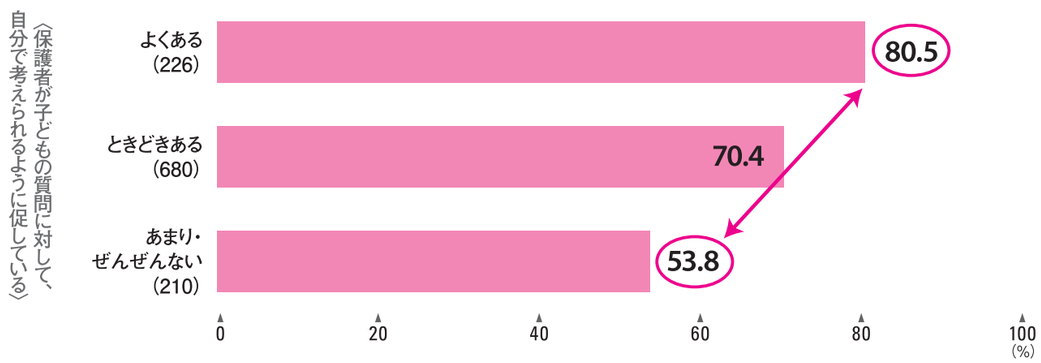
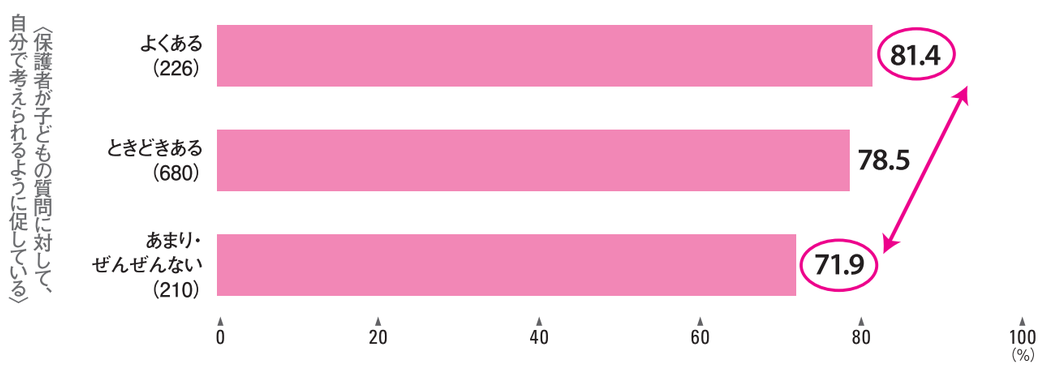


図4-2 人の話が終わるまで静かに聞ける（年長児）



※1：（　）内はサンプル数

★保護者が子どもに対して、自分で考えられるようによく促すほど「物事をあきらめずに挑戦することができる」「人の話が終わるまで静かに聞ける」割合が高い傾向にありました。「自分で考えられるように促す」というのは、子どもの言葉を受け止めてよい聞き手となり、子ども自身が自信をもって考えられるようにしていくということです。

秋田先生の解説　「子どもの質問に対して、自分で考えられるようにしている」ということは、子どもの能力や可能性を信頼していなくてはできません。子どもを助けるのではなく、いかに力を引き出すかといった保育観や教育観を根底にもっているからこそ、学びに向かう力が育っていくのではないかと思います。

保育者や保護者にとって大切なのは、「先を見通した見守り」です。先の見通しがもてなければ、保育者や保護者は見守ることができず、「不安だからこれも言っておこう」「自分がやってしまった方が早い」などとなってしまいがちです。そうではなく、子どもに主体的に選択できる余地を与えることが、学びに向かう力を育てると思います。

調査概要

調査名称：幼児期から小学１年生の家庭教育調査
調査対象：年少児～小学1年生の子どももつ母親
有効回答数：5,016 名
調査時期：2012 年１～２月
調査地域：全国
調査方法：郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）
調査項目：子どもの生活時間／子どもの学習のレディネス／母親のかかわり／母親の教育観／園・小学校の満足度など

●今回ご紹介したのはこの調査の一部です。詳しい調査結果はベネッセ次世代育成研究所ホームページをご覧ください。（http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/）

第２特集

園内環境を見直す 7つのポイントと工夫

生活の場としての園の役割が大きくなる中、
新年度に向けて園の保育環境を見直すヒントをご紹介します。

インタビュー

「子ども視点」で保育環境を見直す

どんなところに気を配れば、子どもが落ち着いて過ごしながらも、
主体的に活動することができる環境になるのでしょうか。
保育環境に関するアドバイザーも務める
早稲田大学准教授の佐藤将之先生にお話をうかがいました。

保育環境を考えることが保育理念の実現に近づく一歩に

「子どもに対する思い」は保育環境に表れる

保育環境の改善は、保育の質を高めるための欠かせない取り組みと言えます。保育環境を考えることは、どのような子どもを育てたいかという保育の理念を再考し、子どもに対する思いを見つめ直すきっかけになるからです。

保育環境はどの園でも多少なりとも課題を抱えているものです。建物や設備の事情によって制限される面もありますが、そこを工夫やアイディアによってカバーしようという気持ちが大切になります。

さらに保育環境は、子どもが落ち着いた気持ちになれるか、また主体的に活動できるかといった「子ども視点」で検討することが何より大切です。しかし意外と、管理する側、すなわち保育者の都合で環境がつくられていることも多いものです。

保育環境を見直す際は、「誰のための環境か」をよく考えることが大切だと思います。

環境づくりで心がけたい7つのポイント

次に、保育環境を見直すうえで心がけたいポイントを説明します。

❶ 現在の環境を見直して評価する

例えばスウェーデンでは、さまざまな活動スペースの写真を並べて貼り、子どもたちにひとり１票でお気に入りの場所を投票してもらっています。投票用紙は、クリップに名前をつけたもので、いいと思った場所の写真をそれで挟むアイディアです。結果をもとに、保育者は環境について話し合い、改善につなげています。こうした方法などを用いて、子ども視点で環境を検討することが非常に重要だと思います。

早稲田大学
准教授
佐藤将之
さとう・まさゆき
◎早稲田大学人間科学学術院准教授。江戸東京博物館委嘱こども居場所づくりコーディネーターなどを経て現職。専門は、こども環境学、環境行動研究、建築計画研究など。共著に『フィールドワークの実践』（朝倉書店）がある。

❷ まずは試しにやってみる

最初から大がかりな変更をする必要はありません。小さなことでもいいので、「こうした方が子どもにとってよさそう」といった思いつきを試してみます。失敗したら、直せばいいのです。まずは課題意識をもって環境を見回し、「トライアル・アンド・エラー」の気持ちで取り組みましょう。一人ひとりの保育者が「保育環境デザイナー」の役割をもっていることを忘れないでいただけたらと思います。

❸ 予算がなければ「手作り」も

新たな環境を取り入れたくても予算がネックになって難しいという園があるかもしれません。しかし、お金がなくても、身のまわりのものに手を加えることで意外とカバーできるものです。ある園では、畳の大きさほどの段ボールに模造紙や色紙を貼って折り畳める掲示板を作っていました。子どもの活動に役立つのなら、高価さは必要ありません。丁寧さがわかる手作りの良さは、子どもに伝わるものです。

❹ 保護者や地域に協力を仰ぐ

ある園で、子どもが「セミを捕まえるための台がほしい」と考えました。そこで休日に父親が集まって木のまわりにオリジナルの遊具を作りました（写真右上）。父親たちが作った遊具なのでいっそう愛着がわきますから、教育的にも意味のある環境づくりとなりました。

子どもの環境づくりでは、保護者だけではなく、地域の高齢者の協力を仰いでいる事例もあります。そのように環境づくりを通して、保護者同士の関係を深めたり、地域と連携したりすることも可能です。

❺ 子どもがひとりで過ごせる場所をつくる

これまで保育環境といえば、「いかに子どもがにぎやかに遊べるか」を中心に考えられてきた気がします。これは「集団のための環境」が重視されてきたからだと思いますが、これからの保育では「一人ひとりのための環境」に移行することが重要になります。

ひとりで落ち着いて過ごしたり、泣いたりできる場所があると、子どもが友だちとの距離を調整して自分なりのリズムをつくれます。こうしたスペースは、特別な部屋がなくても、家具などで囲われた場所をつくることでも用意できます。

❻「座る」環境を取り入れる

子どもにとって座ることは、落ち着きを取り戻すよいきっかけとなります。いろいろな場所に椅子を置いたり、ちょっとした段差に座れるようにしたりして、活動にメリハリをつけられるとよいと思います。

約10名の父親が参加して遊具を制作しました。父親同士が仲良くなるという効果もあったそうです。（埼玉県・ルンビニ幼稚園）

❼ できれば「食寝分離」を

一般的な住居でも食べる場所と寝る場所は、別々にすることが基本です。しかし施設的な問題で難しいという園もあるでしょう。空間を分けるのが難しい場合は、椅子や机を運んで複数クラスで食べたり、クラスごとに食べる時間をずらすなど工夫してみてはいかがでしょうか。

現場のみなさんへ

◎保育者のみなさんが楽しいと感じることで、きっと子どもたちも十分に楽しさを感じられると思います。ですから、どうかみなさん、楽しんで保育をしてください！保育環境の整備も楽しみながら取り組めば、よりよいアイディアが出てくると思いますよ。

まずは“やってみる”気持ちから！

今日から見直す保育の室内環境

早稲田大学准教授の佐藤将之先生の7つのアドバイスに沿って、
実際に園で行われている工夫をご紹介します。
自園の園内環境の見直しのヒントにしていただければ幸いです。

① まずは試しにやってみる

普段の保育の中での気づきやちょっとしたアイディアを
形にしてみましょう。

写真は、埼玉県・認定こども園こどものもり

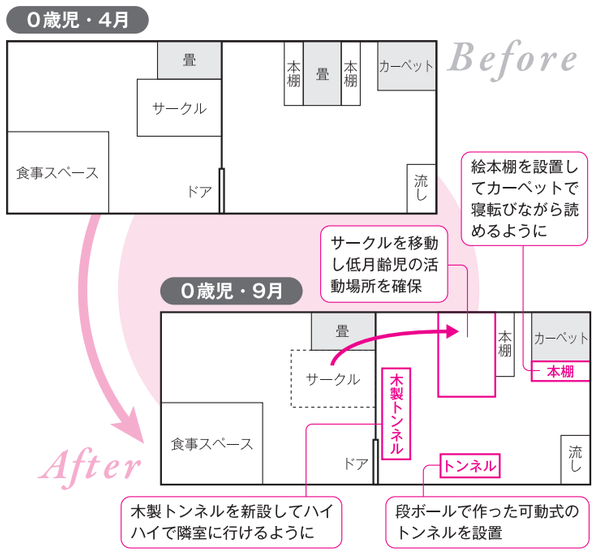
通路やデッキにいろいろな種類の観葉植物を置き、居心地のよい空間に

効果▶自然にふれることで情緒、感性を育てることが目的です。園庭に植えている木や植物の他にも、さまざまな種類の植物にふれられる環境をつくり、季節感や育てる体験を通して、自然の大切さを伝えていくというねらいもあります。

実施のポイント▶屋外だけではなく、屋内にも植木鉢や草花などを飾ることで、室内環境の雰囲気が変化し、心が落ちついたり癒やされたりする効果が生まれます。

② 現在の環境を見直して評価する

子どもの視点から保育環境を見直し、ときには大きく
室内の配置を変えてみてもよいでしょう。



※ここでは保育室のレイアウトや物の配置変更の一部を抜粋してご紹介しています。

発達に合わせて物の配置を見直し、子どものやりたいことを実現できる環境に

効果▶０歳児は特に発達が著しいので、毎月子どもの様子を細かに見ながら少しずつ変えています。子どものやりたいことや欲求をつかみ、それに応じた環境を用意することで、子ども自身の意欲を大切にできます。気持ちが安定した結果、無用なトラブルが減り、ケガが少なくなるといった効果があったといいます。

実施のポイント▶東京都千代田区立いずみこども園では、０歳児の毎月のカリキュラム表の中に、保育室のレイアウト図を入れています。子どもの発達を踏まえて、その月に変えたところや重点的に見ていきたい場所などを書きこんで、保育者間で共有しています。また、成長や発達にあわせて遊びやおもちゃをあらかじめ用意し、「この遊びに飽きてきたようだ」「もっとつかまり立ちしたいみたい」など変化が見られたら、物の配置を変えるなどの工夫をしています。

③ 予算がなければ「手作り」も

大がかりなものでなくても構いません。
少し生活空間を区切るだけでも、周囲とは違った
空間をつくり出せます。

写真は、千葉県・市川市立大洲幼稚園

手作りの読み聞かせ用ボードで、よりお話に集中できる

効果▶絵本の読み聞かせのときにボードを立てることで、物語の世界に集中して入り込みやすくなります。配慮が必要な子どもにとってもよい効果があります。絵本だけではなく、制作の際の見本を見せるときに使っても、子どもの視線を集めやすくなります。

実施のポイント▶軽い素材がおすすめです。板で作ると出し入れが大変ですし、倒れたときに危険だからです。段ボールだと持ち運びしやすいでしょう。絵本の世界が引き立つように、布の柄はあまり大きくないものがよいようです。

写真は、東京都・江東区白河かもめ保育園

地域の方も巻き込んで、子どもの目線に合った棚を手作り

効果▶子どもが自然物にふれるためのコーナーを手作りする園もあります。サイズなどが思いどおりにできること、子どもの様子などを見て考えるため、子どもの発達や興味に合っていること、またコストが安いことなどは手作りならではのメリットです。

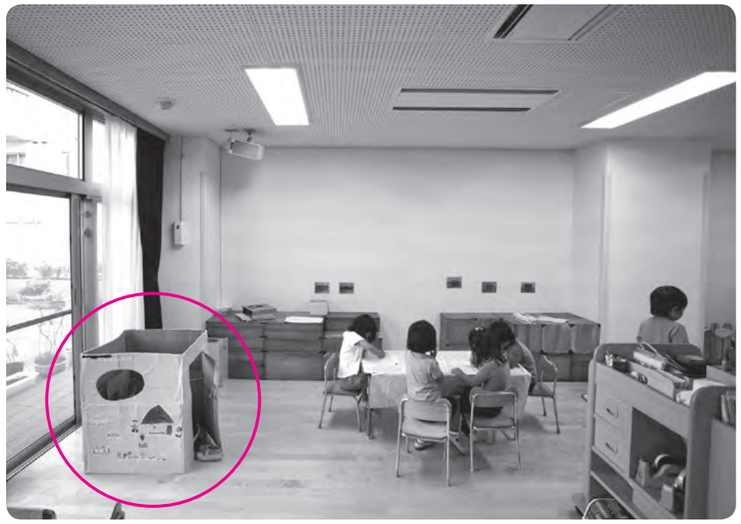
実施のポイント▶棚が転倒しないように、裏側はベンチにして補強するなど十分な配慮が必要です。多くの園では木工が得意な人はそれほどいないかもしれませんが、保護者や地域のボランティアのかたの力を借りるなどして全員で協力して作るとよいでしょう。

④ 保護者や地域に協力を仰ぐ

P.17 でご紹介している埼玉県・ルンビニ幼稚園の内容をご覧ください。

5 ひとりで過ごせる場所をつくる

ひとりで過ごせる場所があると子どもが落ち着いて過ごせます。



写真は、東京都・品川区立御殿山幼稚園

段ボールで「おうち」を作り、全体の活動から距離を置く時間を

効果▶集団から少し離れた場所にひとりになれる場所があると、子どもは何かに集中したり、気持ちを静めたり、ときには泣いたりと、そのときの気持ちに合った過ごし方ができます。東京都・品川区立御殿山幼稚園では、１～２人が入れる段ボールで「おうち」を作り、お絵描きやパズルなどにひとりで集中して取り組みたい子どもが家の中で遊んでいます。集団生活の中でひと息付ける場をもてるようにと願って作りました。特に預かり保育の子どもは時間が長いため、ひとりで過ごせる時間も大切だと考えていると園長先生は言います。

実施のポイント▶最初、窓がないおうちを作りましたが、完全に隔離されるのは嫌なのか、なかなか子どもが入ろうとしませんでした。保育者が段ボールを切って窓にすると、喜んで入るようになったそうです。友だちの息づかいが感じられるような距離感で設置するのがポイントです。

6 「座る」環境を取り入れる

活動の合間に「座る」ことを取り入れることで、他の活動から気持ちを切り替えるきっかけになったり、落ち着いたりすることができます。

「座る」場面を取り入れて活動にメリハリを

効果▶活動の合間に「座る」場面を取り入れることで、他の活動から気持ちを切り替えるきっかけになったり、落ち着いたりすることができます。また一人がけの椅子や２～３人がけのベンチを置くことで子ども同士の新たなかかわりも生まれます。

実施のポイント▶園庭のいろいろな場所に椅子を置くことによって、子どもがひと息ついたり、活動にメリハリを付けることができます。また、四方を囲む形で本棚を配置し、テーブルと椅子を置いて、ゆっくり座りながら読書できるようにしている園もあります。

写真左は、東京都・江東区白河かもめ保育園／写真右は、埼玉県・認定こども園こどものもり

7 できれば「食寝分離」を

設備にもよりますが、「食寝分離」が理想です。
食事のひとときの雰囲気づくりも
心がけたいですね。

写真は、埼玉県・認定こども園こどものもり

ゆっくりとくつろいで食べられる空間づくり

効果▶ランチルームのテーブルにはクロスをかけて、季節の野の花を飾り、食事中はオルゴールの演奏曲を流しています。ランチルームで食べることで、それまでの活動から完全に気持ちが離れて食べる心の準備ができるようです。

実施のポイント▶ざわざわしがちな食事の時間ですが、保育者が「オルゴールが聞こえるくらいの声でお話しして食べようね」と会話の音量を抑えられるよう声をかけています。また、その日の体調に応じて自分の食べられる量を調節できるビュッフェスタイルで、おいしく食べたり、楽しく食べたりする雰囲気づくりを心がけています。

読者からのアイディア集

全国の園長先生から寄せられた「保育環境」の工夫をご紹介します。

ひとりで過ごせる場所をつくる

- ベッドやボックスでついたてをつくり、ひとり遊びがゆっくりできる空間を確保したところ、よくお友だちにかみついていた子が落ち着きました。
（大阪府・私立保育園）

自然とふれ合う工夫

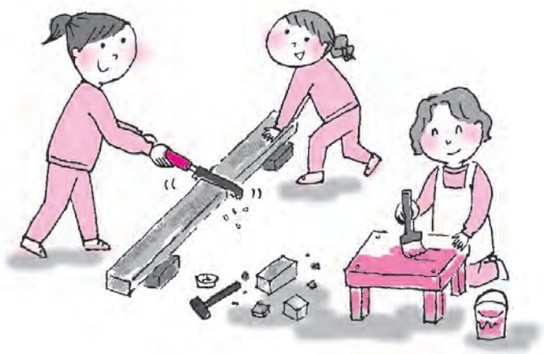
- できるだけ園外散歩に出かけ、季節の草花、果実をとってきて保育室に飾りました。自然を紹介するコーナーをつくり、ままごと遊びや絵本も充実させました。
（三重県・公立保育園）

くつろぎ、落ち着く工夫

- 「静」の遊びと「動」の遊びの場所を明確に分けてメリハリをつけています。（愛知県・私立保育園）

「座る」場面を取り入れる

- 保育室にソファーやベンチを置いています。パーテーションの代わりになりますし、「自由に座る」「並んで座る」などと座り方を変えると新たな人間関係の場ができます。（静岡県・私立保育園）



「食寝分離」を進める

- 寝・食・住の部屋を分けました（ホール・ランチルーム・保育室）。また押し入れを活用したリラックススペースやトラブルを話し合うピーステーブルを設置しました。その結果、子どもの生活のリズムが整い、保育がスムーズになりました。保育者にはトラブルを落ちついて話し合う姿が見られるようになりました。
（長崎県・私立保育園）

予算がなければ「手作り」も

- 大きな部屋で０歳児と１歳児を合同保育していましたが、危険な場面が見られたため、分けることにしました。100円ショップやホームセンターで木材などを購入し、職員たちで大工仕事をして０歳児室・１歳児室に分けて保育をしています。仕切りは互いに部屋がのぞけるようにしました。（宮城県・私立保育園）

園内環境を見直すための「チェックシート」

◎深く悩まずに直感でお答えください。
◎園内研修などにもぜひご活用ください。

自園の園内環境を振り返り、よい点や改善点などを把握

これは、佐藤将之先生のお話をもとに編集部が作成した、「子ども視点」で園内環境を見直すためのチェックシートです。自園の園内環境のよい点、改善点を把握し、園内環境をよりよいものとするためにご活用いただければ幸いです。

チェックの際は、園長だけでなく、保育者と一緒に行うことをおすすめします。各保育者が保育の中で改善したい点が出てくることもあるでしょう。チェックシートの各項目を題材に会話することで、園長の保育観や経験を保育者に伝える研修の場になるでしょう。

チェック内容	自己評価	
① 保育理念を環境設定に反映しているか	□とてもしている □まあしている	□あまりしていない □まったくしていない
② 毎年、少しずつでも園内環境を変えているか	□とてもしている □まあしている	□あまりしていない □まったくしていない
③「子どもが好きな空間」を保育者が理解しているか	□とてもしている □まあしている	□あまりしていない □まったくしていない
④ 子どもの目の高さを考慮した環境設定にしているか	□とてもしている □まあしている	□あまりしていない □まったくしていない
⑤ 保育者と一緒に園内環境について話したり、見直す機会があるか	□よくある □まあある	□あまりない □まったくない
⑥ 子どもがひとりで落ち着いて過ごすことができる環境があるか	□とてもある □まあある	□あまりない □まったくない
⑦ 食べる空間（時間）と寝る空間（時間）が分けられているか	□よく分けられている □まあ分けられている	□あまり分けられていない □まったく分けられていない
⑧ 保育者や地域の人材の得意分野を生かした環境設定をしているか	□とてもしている □まあしている	□あまりしていない □まったくしていない

●上記のチェック結果を踏まえ、よい点と改善したいことの傾向をご記入ください。	●今後、自園の室内環境を改善していくために取り組みたい具体的な行動をご記入ください。

※このチェックシートは、本誌16～17ページに登場いただいた佐藤先生のお話をもとに編集部が整理したものです。

どう見る？ 子どもの行動

子どもたちが日々見せてくれるさまざまな行動について、
発達上の理解と援助という観点から解説します。
園内研修 保護者への情報提供 にご活用ください。

今回のテーマ　うそ

うそをつかなくても解決できる方法を伝える

お母さん、毎日残さないで食べてるよ！

4歳・春

4歳児クラスの担任は、あるとき、クラスのごみ箱に毎日のようにお弁当の残りが捨てられていることに気づきました。よく観察すると、食事が始まった直後、レイナがごみ箱に近づいています。以前、レイナの母親は「『毎日お弁当残さず食べてるよ』と言ってくれてうれしい」と担任に話していたのですが…。

1

食事の後、ほかの子どもたちが遊びに夢中になっているときに担任は「どうして捨てたの？」とレイナにこっそり理由を尋ねました。

2

レイナは「全部きれいに食べないとお母さんに叱られる」と言います。嫌いなものがあるからではなく、量が多すぎるというのです。

3

担任は「それでもうそをつくのはいけないよ」「お母さんはたくさん食べて大きくなってほしいの」と話した上で、「お母さんに相談してみようね」とレイナに言いました。

4

担任はその日の降園時、母親にレイナの気持ちを伝え、量の調節を提案。母親も了承し、捨てていた分を減らしました。レイナは安心してお弁当を食べられるようになりました。

こうした子どもの行動の意味を、どう見ますか？

発達にとっての意味は？

現実のうそをつくのは知的な発達の証拠

子どものうそは、大きく二つに分けることができます。まず、空想のうそで、これは「こうだったらいいな」という子どもの願望がそのまま言葉になって出てきたものです。3歳児では空想と現実が入り交じったようなうそが多く、本人もうそだという自覚がありません。もうひとつは、現実のうそで、自分にとって都合が悪い状況になったときに自分を守ろうとしたり、誰かに責任を転嫁しようとしたりして、発せられるものです。周囲の状況と自分の立場がある程度わかるようになる5歳くらいから、こうした現実のうそが見られるようになります。つまり、自分に都合のよいうそ、相手を困らせるうそをつくということは、物事の見通しがもて、因果関係がわかるようになったから、とも言えるのです。

大人のサポートは？

うそをつかなくても問題は解決できることを知らせる

非現実的な体験を語るような空想のうそには、目くじらを立てる必要はありません。4歳ごろまでは子どもは時間の経過を把握できないため、だいぶ前の出来事を「昨日」「明日」と説明することもしばしばです。訂正しようとしても「本当」と言い張ることもあります。成長とともになくなるうそで、決して虚言癖などではありませんので、「旅行に行ったんだね。楽しかったんだね」などと楽しかった内容（本人が一番訴えたいこと）に話題をもっていくとよいでしょう。

5歳児ごろからの現実のうそに対しては、まず「うそはいけないこと」を納得できるように説明します。「困る」「悲しくなる」など、そのうそによって誰がどんな思いをするのかを話し、自分が同じ立場になったらどうかを一緒に考えます。「うそはダメ！」のひと言で終わらせないことが大切です。

また、本人がうそをつかざるを得なくなった状況を聞き、そのときの気持ちに共感を示した上で、「うそをつかないで、状況を改善するにはどうすればいいか」を一緒に考えましょう。うそをつくことは自分も相手も嫌な気持ちになるし、うそをつかなくても解決の方法は必ず見つかる…そう考えられるように子どもの気持ちを支えるとよいでしょう。